

曲渕江里子

（平成三十一年四月号）

蜜蜂の羽音高まりふいに消ゆ食虫植物展示室の午後

綻びを日毎繕い悲しみをスूपに溶かす職に就きたり

誕生日^{パースデー}ケーキのような花壇あり蜂忙しきホスピスの庭

死んでゆく老い猫という夏の庭蜜蜂も蜥蜴も私も

寄せる波の強き力で息を吐き猫は死にけりジャスマミンの庭

烏羽の曜変天目藍深き海よりモルフオ蝶の飛び立つ

陽の射さぬ谷の小さな家々をチヨウゲンボウが今朝越えてゆく

あざみ咲く斜面に山羊の放たれて朝の水辺に夏がまた来る



●作者の言葉

この度は年間選者賞を頂き大変有難うございました。

佐佐木幸綱先生の「短歌道場」の講座で生まれて初めて

短歌を作りました。五年前の

ことです。その後「心の花」に入れて頂き、素晴らしい先輩

達に出逢い、今日までずっと歌うことが楽しくて、大好き

で、歌に出逢えたことに感謝して過ごしてきました。

谷岡先生に頂いた言葉、「短歌は魂の舞踊です。楽しく踊ってください」を北極星にして、これからも歌うことを許されて生きていけたら幸せです。

●選者の言葉

曲渕江里子のこの連作について私は、四月号の「選歌ルーム」に、「極彩色でエキゾチックなセンチメントに、アンリ・ルソーの絵を見る感覚がある」と書いた。アンリ・ルソーの絵は、密林を主題とした「神秘的象徴性」に溢れる「異国情緒」に特色がある、とされる。この一連でも、飛び交う蜜蜂や食虫植物を初めとする動植物たちの、むせかえる生命感の背後に、「死んでゆく老い猫」に象徴される運命の影が差している。夏の光の中に、まばゆすぎて普段は見えない滅びの気配がふと揺らぐ。そのごく微妙な翳りをこそ読むべきだろう。

・綻びを日毎繕い悲しみをスूपに溶かす職に就きたり

歌作りもまた、そうした「天職」である。